中田正造

本名
中須賀正三

なかた・しょうぞう　なかすが・まさみつ

舞台俳優、新声劇団団長

経　歴

生:明治26年(1893年)1月3日、広島県沼隈郡松永町(現福山市松永)生まれ

没:昭和20年(1945年)6月6日、京都府下で肺炎のため病没、享年53歳、大阪市東淀川区の大道霊園に葬る

明治32年(1911年)	6歳	父を亡くす
明治35年(1911年)	10歳	母を亡くす
―	―	松永小学校卒業
明治44年(1911年)	19歳	広島県立福山中学校(誠之館)卒業
明治44年(1911年)	19歳	早稲田大学入学
大正3年(1914年)	22歳	早稲田大学中退
大正3年(1914年)	22歳	「芸術座」に入る
大正4年(1915年)	22歳	尾道・偕楽座で公演

大正4年(1915年)	22歳	海外巡業(台湾・朝鮮・満州)
―	―	帰朝後廃業し、朝鮮に渡る
大正6年(1917年)正月	24歳	京都南座における「新国劇」 旗揚げに参画
大正6年(1917年)5月	24歳	新国劇を去る
大正9年(1920年)8月	27歳	民衆劇団「新声劇団」に参加
大正13年(1924年)	32歳	「関西新派劇」を組織
昭和6年(1931年)	39歳	「中田正造劇団」
昭和8年(1933年)	41歳	劇団「享楽列車」
昭和15年(1940年)ごろ	48歳ごろ	劇団を解散
―	―	大阪で商業を営む
昭和20年(1945年)3月10日	53歳	大阪の空襲で被災

生い立ちと学業、業績

生家は代々鞆の浦・沼名前神社の宮司であったが、父正秀は家業を継がず官吏(参議)として愛媛県松山市に赴任していた。
しかし正三6歳の明治32年(1899年)、父は46歳という若さで病没。
遺児4人と母は鞆へ引き上げてきたが、その母ヒデも3年後に他界している。
長男と次男は姫路で医業を営む父の弟の元へ引き取られ、3男の正三と4男は沼隈郡松永(現・福山市松永町)に住んでいた祖父の身寄りに養育された。
松永小学校を卒業して福山中学進学後は近所に住む福原麟太郎と一緒に汽車で通学した。
明治44年(1911年)卒業後は早稲田大学に進学。
大正3年(1914)頃、大学を中途退学し、設立されて間もない島村抱月、松井須磨子らの「芸術座」に入る。
翌4年(1915年)の全国巡業の際、尾道・偕楽座でも公演、須磨子の『サロメ』に出演している。
さらに同年の海外巡業(台湾・朝鮮・満州)にも同行したが、帰朝後間もなく廃業を決意して再び朝鮮に渡る。
しかし、翌大正6年(1917)翻意し、正月に京都南座に於いて澤田正二郎、倉橋仙太郎、小川隆らと共に「新国劇」旗揚げに参画したが、「新国劇」は同年5月、東京新富座の旗揚げ公演に失敗し、劇団を去る。
その後自ら民衆劇団「新声劇団」に参加。
同劇団で活動する傍ら大正13年(1924)には山口俊雄、都築文男らと「関西新派劇」を組織している。
「新声劇団」は関西を本拠地として活動するが、座員100余名を率いて浅草松竹座公演なども行った。その際は、葛原しげる氏をはじめとする郷党220余名が後援会を結成し、阿部伯爵を筆頭に大挙して観劇し、福山城天守閣・伏見櫓の絵柄にトンド音頭の文句を墨書した舞台

大引幕を贈っている。
その時の印象を福原麟太郎氏は「福山学生会雑誌・第64号」に寄せた「秋閑雑記」(大正15年11月11日付)と題する小文の中で
「会って見れば旧知に相違ないので、随分思いきった批評もするようになった」
と言い乍ら
「彼の写実主義は、その心核に於いて成功した。そこには本当の人間の魂があり……実際『終点』(中村吉蔵作)は菊五郎のリアリズムと並んで遜色のないものだ……」
と記している。

大正末から昭和初期にかけてが活動のピーク時で、松竹の創始者、白井松次郎・大谷竹次郎両氏の知遇を得て東京・浅草松竹座、名古屋・御園座、大阪・道頓堀角座、中座、京都・南座などで活躍している。
劇団には志村喬、左卜全などが所属していたこともあるが、映画産業の発展とともに消長著しく、昭和6年(1931)には「中田正造劇団」に、昭和8年(1933)には劇団「享楽列車」へと変遷、一時銀幕スターの月形龍之介を劇団に迎えたが、彼の去った後、戦時色の高まる中、昭和15年(1940年)頃劇団を解散している。
その後『NHKのラジオ放送劇に西郷隆盛役で出演していたのが、役者としての叔父の声を聞いた最後でした』と甥(正三の次兄・正森の子)の中須賀敏氏は述懐している。

演劇界から引退後は大阪で商業を営み、昭和20年(1945年)3月10日の大阪大空襲の際被災、同年6月6日、疎開先の京都府八木町、南丹病院に於いて肺炎をこじらせ逝去。
享年53歳であった。
妻利子〔昭和50年(1975年)没〕との間に子はなく、正三夫妻は大阪市東淀川区の大道霊園の墓所に葬られている。

前述、都築文男、澤田正二郎らは大阪市が昭和42年(1977年)に制定した「上方芸能人顕彰」に名を記されその事蹟が顕彰されているが、日本演劇史上にエポックを画した中田正造の名は見当たらず、人物像とその事蹟が曖昧なままに忘れ去られようとしていることは、まことに残念である。

尚、中田正造の芸名の由来について、中須賀敏氏より興味深い逸話を頂戴したので追記する。
それによると、あの「襤褸の旗」のモデルとなった明治の政治家・田中正造(足尾鉱毒事件で公害と環境破壊に対して農民の先頭に立って闘った。映画では三国連太郎が演じている)の生きざまに感銘をうけ、田中を中田として芸名とした、と敏氏の姉が直接正三氏本人から聞いたということである。　　荒木聢志(昭和30年卒)

参考資料1:『福山学生会雑誌(第64号)』、「秋閑雑記」、福原麟太郎、福山学生会事務所編刊、大正15年11月11日

2006年6月9日更新:タイトル●2007年10月1日更新:経歴・本文●2008年4月30日更新:本文・関連情報削除●